

## モネ それからの100年

名古屋市美術館 2018. 04. 25～07. 01 横浜美術館 2018. 07. 14～09. 24

「クロード・モネ」(1840～1926)は、言わずと知れた“印象派を代表する巨匠”で、風景をひたすら見つめ描き続けた画伯の独創性や創作上の関心は、今日の作家たちにも様々な形で引き継がれ、ゆるぎない人気があることで名高い。

本展では、「モネ」の初期から晩年までの絵画「約30点」に加え、後世代の「アルフレッド・スティーグリッツ」「ヴィレム・デ・クーニング」「アンディ・ウォーホル」「堂本尚郎」「中西夏之」「福田美蘭」「鈴木理策」ら、約30作家の現代アートと対峙させることで、「モネ芸術」の神髄に迫ろうという企画である。

モネの作品の色彩の鮮やかさ、描線、画面、風景の眼差しなどの特質を抽出し、それらを時代、地域、部門を超えた現代芸術との共鳴を浮き彫りにすることで、「モネ」芸術の豊かさと奥深さに加えて普遍的な魅力に迫る内容である。



モネ《睡蓮》 1914～17年 油彩/カンヴァス 横浜会場のみのお出品 左

画伯が白内障を患ってからの作品であるため、目がどんどん水面に近づいて、睡蓮も水面に映る木々もほとんど抽象化して、画面が有機的に生み出されていく過程から、精神的な空間が出現することを発見したとされている。

モネは、睡蓮を描く時は花や葉を見つめるより、「水の反映」を眺めていたとされ、視線をたゆたわせて素早くとらえて描写をしているのが特徴である。

モネ 《柳》 1897～98年頃 油彩/カンヴァス 中

柳と水の一部だけを描くことで全体を暗示させる作品で、瞬間の印象の定着というより自らの内面に向かい合って妄想している感じで、鑑賞する者の想像力によってイメージが広がる手法に「風景画」の新しい未来像が示されている。

福田美蘭 (1963～ ) 《モネの睡蓮》部分 2002年 アクリル/カンヴァス 右

彼女は、絵画への斬新な問題意識と抜群のセンスと技には、多くの革新的な作品を生み日本の現代美術に刺激と希望を与えて、「絵を描くことによって、何を表現したいのか」ということを最も大切にして、確固とした制作の姿勢を抱いている画家である。